

## 現代サラフィー主義研究の課題と展望

米田 優作\*

### A Critical Review on Contemporary Salafism Studies: Towards a Comprehensive Analysis

YONEDA Yusaku

In the last two decades, academic interest in Salafism has increased under the influence of the following events. The first is 9/11. Most of the research has focused on the particular aspects of the violent Jihadi aspects of Salafism. The second is the Arab Spring, which occurred in 2011 and spilled over into the Middle East and North Africa. Amid the post-Arab Spring political trends, Salafists formed political parties and began to involve themselves in the political sphere. This politicization of Salafism has attracted the attention of researchers. The rise of the Islamic State (Tanẓīm al-Dawla al-Islāmīya; Dā'ish) in the vortex of political turmoil after the Arab Spring has also led to a resurgence of studies on Jihadism.

As mentioned above, Salafism has been the subject of considerable academic debate in recent years, but how it has been presented and its conceptual definition are inconsistent. Accordingly, this paper aims to review the studies on contemporary Salafism, focusing on how it is being defined and the debate on the typology and analytical framework in which it is placed. Through this process, it can be expected to clarify how research has progressed and propose future research questions in this subject.

#### 1. はじめに

2011年にチュニジアを発端として生じた民衆による民主化要求運動、いわゆる「アラブの春」は中東・北アフリカ地域に波及し、地域秩序に大きな変動をもたらした。なかでも、チュニジアやエジプト、リビアなどでは体制転換が生じ、旧政権による権威主義的な体制下で、反体制派として監視や抑制、統制の対象であったイスラーム主義者が、体制転換後に台頭するという現象が見られた。ムスリム同胞団に代表されるようなイスラーム主義勢力以外にも、サラフィー主義者が公的領域における活動を活発化させ、従来であれば距離を置いてきたはずの政治的領域においてもその存在感を高めた[鈴木2012, 2013; 福田2012]ことは、サラフィー主義に対する学術的な関心を高めた要因となった。「アラブの春」によって体制転換が生じた国以外にも、広く中東・北アフリカ地域においてサラフィー主義者の影響力の増大が見られたものの、これまでイスラームと政治の関係性について取り上げた研究においては、同胞団系のイスラーム主義の思想や行動、組織実態の分析が中心的な位置を占めてきた。近年においてはジハード主義組織に関する研究の数が増大傾向にあるといえよう。

このように、サラフィー主義は、近年、研究者の注目を集めてきているが、その実態の描き方が多様であるがゆえに概念としての定義も一様であるとは言えない。そこで、本稿では、現代におけるサラフィー主義研究のなかでも、とりわけ定義のされ方や分析概念に関する議論を中心に概観し、そこにおける特徴と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

---

\* 立命館大学大学院国際関係研究科

構成は以下の通りである。第2節では、まず現代におけるサラフィー主義が持つ諸相について、これまでの研究者らによる定義のされ方や運動の諸形態を追うことで確認する。次に、第3節では、多様な側面を持った現代におけるサラフィー主義を分析する際にどのような動向が見られるかということについて、中東・北アフリカ地域におけるサラフィー主義運動を扱った欧米言語の先行研究を中心に概観し、そこにおける意義や特徴について整理する。最後に、第3節で整理した主要な参照軸となっている分析概念への経路依存性により生じている問題について触れ、その課題を踏まえたうえで、現代のサラフィー主義運動をどのように理解すべきか、という展望を述べる。第3節と第4節の作業を通じて、現代のサラフィー主義研究における1つの到達点としての断片化傾向を指摘し、その枠組みへの経路依存から脱却して、総合的に理解するための視座について検討するための一歩を踏み出してみたい。

## 2. サラフィー主義はどのように定義されてきたのか

サラフィー主義とは何を指し、どのようなイデオロギーを持つものであるか、ということについて、これまで様々な論者による定義が試みられてきた。しかし、その多様性のなかにも、一定程度の共通点が見られる。その1つが、サラフの時代へと回帰する志向を特徴の1つとするイスラーム改革思想の潮流に対して、近代におけるサラフィー主義という定義を行っているものである。次に挙げる3つの文献は、イスラーム研究において頻繁に参照される文献であり、これらには同様の傾向が見られる。

まず1つ目は、ブリル社の『イスラーム百科事典 (*The Encyclopaedia of Islam, 2nd edition*)』<sup>1)</sup>における定義である。そこでは、サラフィー主義は「19世紀後半に端を発し、エジプトを中心とした、『優れた／篤信の初期世代 (*al-Salaf al-Ṣāliḥ*, 以下本稿では篤信の初期世代と訳出)』<sup>2)</sup>の時代に代表される伝統へと回帰することによってイスラーム(の影響力)を再び蘇らせようとした、イスラーム改革主義の一種」[Shinar and Ende 2002]と定義されている。そこで代表的な思想家として挙げられているのが、ムハンマド・アブドゥフ (*Muḥammad ‘Abduh*, 1849–1905)であり、アブドゥフの思想・活動の遍歴や『アル＝マナール』などの出版物がチュニジアやアルジェリア、モロッコなどの北アフリカ地域や、エジプト、シリアなどの東アラブ地域におけるウラマー集団や政治・社会運動における活動家らにどのように影響・作用し、各地域や国民国家別においてサラフィー主義運動が興隆したかということについて中心的に整理がされているといえよう。

2つ目は、オックスフォード大学出版の『研究ハンドブック (*The Oxford Handbook of Islam and Politics*)』における記述である。そこでは、現代において「サラフィー」を冠する運動には他の側面があることは指摘されつつも、サラフィー主義を、ジャマールッディーン・アフガーニー (*Jamāl al-Dīn al-Afghānī*, 1838/9–1897)、ムハンマド・アブドゥフ、ラシード・リダー (*Muḥammad Rashīd Riḍā*, 1865–1935)を核とした「改革」運動としての側面に焦点を当てて「近代サラフィー主義」として整理されている [Saeed 2013]。イスラーム政治思想史研究の古典とされるハウラーニーやエナーヤトの著作 [Hourani 1983; Enayat 2005]においても、サラフ (*salaf*) や篤信の初期世代について言及がある箇所は、主にアブドゥフとリダーに関する記述がある部分においてのみであるなど、同様の傾向が見られる。

1) 本稿執筆時点で第3版が刊行中であるが、サラフィー主義の項目は第2版のものが最新である。

2) この篤信の初期世代とは、預言者ムハンマドのハディースである、「最善の世代は私の世代 (*al-Ṣaḥāba*) であり、次いでそれに続く世代 (*al-Ṭābi‘ūn*)、次いでそれに続く世代 (*Ṭābi‘ al-Ṭābi‘īn*) である」を根拠に、預言者ムハンマドの教友と、その次の世代とそれに続く世代を指すのが通説であるとされる [中田 2002]。

3つ目は、日本におけるイスラーム研究のリファレンスの1つである『岩波イスラーム辞典』における定義である。そこでは、サラフィー主義は「後代の逸脱を排して、イスラーム初期世代における原則や精神への回帰を目指す思想潮流」[末近 2002]であると定義されているが、そこにおいてもやはりイスラーム改革思想についての記述が主であり、[Shinar and Ende 2002] や [Saeed 2013] などと同様に、「近代サラフィー主義」としてのイスラーム改革思想の側面のみが整理がされている特徴が見られる。

このように、19世紀以降のイスラーム復興運動の主流をなしたイスラーム改革思想の潮流を指し、サラフィー主義として定義するものが1つの通説をなしてきた<sup>3)</sup>。しかし一方で、同じサラフィー主義という用語は、これまでの通説であると考えられる近代の改革思想の潮流以外にも、より宗教的に厳格で教条主義的な潮流<sup>4)</sup>を説明する際にも用いられてきた。

このように、歴史的な意味での初期イスラームを志向する思想と、西洋近代との邂逅後に登場したイスラーム改革思想(近代主義者)という、異なる思想潮流が同じ「サラフィー主義」というイデオロギーや抽象概念を表す言葉を用いて一括りに論じられることが多かったが、これに対して問題提起をし、「サラフィー主義」という言葉の概念史を辿った先行研究として挙げられるのが、ロジエール(Lauzière, Henri)の著作である。そこでは、イスラーム改革思想の思想潮流に位置付けられる思想家らが自らの運動を指す自称として用いていなかった<sup>5)</sup>のにも関わらず、サラフィー主義=イスラーム改革思想とする定義が、フランスの東洋学者であるマシニョン(Massignon, Louis)が誤って解釈したことを発端に、その後のヨーロッパの東洋学者やムスリムの思想家、アラビア語出版界によって徐々に定着し一般化したことが指摘されている[Lauzière 2010; 2016]。そのうえで、ロジエールは、それに対して修正を迫る必要性を説きつつ、歴史的な意味での初期イスラームを志向する潮流と近代主義者を同じ潮流として論じるべきではなく、また「サラフィー主義」という用語を研究者が恣意的に用いてフレーミングすることに対して慎重になるべきであると論じた[Lauzière 2016: 233–241]。

現代においては、後の第3節でも論じるように、サラフィー主義の実態は、イスラーム改革思想の潮流のみを指すものではなく、より暴力的なジハードを行う主体や、政治空間から距離を置く主体、政治的機会構造の変容により政治化し政治参加する主体など、多様化していることもあり、それらを一般化した際の定義は緩やかなものとなっている。例えば、その代表的なものとして、『オックスフォード研究百科事典宗教篇(*The Oxford Research Encyclopedia of Religion*)』における記述で

3) 先に挙げたもの以外に、[リダー 1987; 小杉 1994; 小杉 2006]などにおいてもイスラーム改革思想を指し、それを近代におけるサラフィー主義とする記述が見られる。[リダー 1987]における解説のなかで、小杉は、「[アル=マナール派]の思想に名称をつけるとすれば、それは『サラフィー主義』となる」と述べている[リダー 1987: 17]。また、「マナール派」が目指した「サラフ」については、単に「歴史的な意味での初期イスラームではない」[リダー 1987: 34]ことや、それゆえに、「マナール派」を復古主義で時代錯誤的と評価することに対して否定的であることが強調される[リダー 1987: 18; 小杉 2006: 230]。のちに概観するロジエール[2010; 2016]の先行研究における問題意識は、小杉が[リダー 1987]や[小杉 2006]において、マナール派が単なる歴史的な意味での初期イスラームを志向する復古主義的なものではない、と説いたように、異なると考えられる歴史的な意味での初期イスラームを志向する思想潮流と、西洋近代との邂逅後のイスラーム改革思想(近代主義者)の思想潮流が、同じ「サラフィー主義」というイデオロギーや抽象概念を表す言葉を用いて一括りに論じられているという点にあると考えられる。

4) 例えば、ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハブ(Muhammad ibn 'Abd al-Wahhāb, 1703–92)が、イブン・タイミーヤ(Taqī al-Dīn Aḥmad ibn Taymiyya, 1263–1328)の思想に基づき、クルアーンとハディースの字義的な解釈と実践によって「篤信の初期世代」における「純粋なイスラーム」に回帰することを主張したことに端を発する思想運動である、アラビア半島におけるワッハブ派[森山 2016]を説明する際など。サウジアラビアにおけるワッハブ派とサラフィー主義の関係については、[福田 2012]なども参照。

5) 一方で、サラフィー主義的な特徴を有すると考えられる思想家は自らをサラフィー主義というある1つの潮流ではなく、自分たちの思想自体がイスラームであると主張するという指摘もあり、自称として用いていないから彼らがサラフィー主義者でないとする議論の仕方については検討の余地があるといえよう。

は、サラフィー主義は「スンナ派イスラームの一潮流であり、篤信の初期世代を見倣い、また彼らを現在の生活のモデルや見本として模倣することを訴える潮流」とされている [Wagemakers 2016b]。

### 3. サラフィー主義はどのように分析されてきたのか

現代において、サラフィー主義は、動態的な政治・社会的文脈のなかにおいて多様な現れ方をし、その影響力を増してきている。本節では、現代におけるサラフィー主義がどのような側面を持っているか、またそれらを分析する際にどのような動向が見られるか、ということについて整理したい。

#### (1) 現代におけるサラフィー主義の多様な実態

これまでサラフィー主義は、その起源についての考察の際に中世や近代における思想潮流に着目されることはあっても、20世紀末ごろまでは学術的な関心をあまり引きつけず、学界では「原理主義」という言葉が研究上のトピックになったとしても、サラフィー主義自体が研究関心上の中心に位置づけられて論じられることは稀であった [Meijer 2009: 1-2]。しかし、この状況は21世紀に入ってから生じた2つの出来事によって一変し、現在に至るまで学術的関心を高めてきているといえよう。その2つの出来事とは、「9.11」と「アラブの春」である。

まず、「9.11」を境に、サラフィー主義に対する関心の高まりが見られた。そこではサラフィー主義のなかでもとりわけ暴力的な「ジハード」に焦点を当てた研究が多数を占めており、安全保障分野や政策分野という側面からの研究が多いなど、ディシプリンの偏りがあるとされ、また、そこでのサラフィー主義やワッハーブ主義は安易に暴力と結び付けて論じられる傾向にあった [Meijer 2009; Gauvain 2013: 11-12]。

次に、「アラブの春」以後の政治動向のなかにおいては、エジプトにおける「ヌール党 (Hizb al-Nūr)」に代表されるように、従来であれば政治的領域から距離を置いてきたサラフィー主義勢力が、政党を組織し政治参加したという現象が見られた。この政治化という現象は、サラフィー主義に対する学術的関心を改めて高めるきっかけとなった<sup>6)</sup>。さらに「アラブの春」以後の政治的混乱の渦中に台頭した「イスラーム国 (IS: Islamic State)」の影響もあって、ジハード主義に関する研究も活発化していると言えよう<sup>7)</sup>。

このように、現代におけるサラフィー主義の実態は、第2節で触れた通説の1つであったイスラーム改革思想としての特徴をもつ潮流のみならず、暴力的なジハードを行う主体や政治的領域から距離をおき個人的な宗教実践に徹する主体、政治化し政治的領域に参加する主体など多様な側面を持ち合わせているといえる。それゆえに、サラフィー主義とはそもそも何であるのか、どの主体をサラフィー主義(者)と呼称するのか、ということをめぐるのは、さまざまな論者のあいだで見解の相違が見られ、また、活発な議論がなされてきた。

そのため、そうした多様な見解から共通点を抽出してサラフィー主義を定義することが試みられてきた1つの結果が、第2節でも確認した「篤信の初期世代を見倣い、また彼らを現在の生活のモデルや見本として採用することを訴える潮流」 [Wagemakers 2016b] といった緩やかな定義である。この緩やかな定義には、問題点がある。なかでも、サラフの時代を道徳や宗教上の手本とする姿勢

6) その証左として、サラフィー主義と政治の関係性を主題の1つとする論文集 [Cavatorta & Merone eds. 2017] が編まれた。これは2000年代に編まれた論文集 [Meijer ed. 2009] の追記的な位置にあるものであり、これら両者は現代のサラフィー主義研究において有用な情報を提供している。

7) その証左として、例えば、[Atwan 2015; アトワーン 2015; Gerges 2017; Maher 2017; Moubayed 2015; ムバイヤド 2016; Warrick 2015; ウォリック 2017; Weiss & Hassan 2016; ワイス & ハサン 2018; 保坂 2017; ケベル & ジャルダン 2017; ロウ 2019] などが挙げられる。

は、スンナ派イスラームの一般的な特徴の1つでもある[小杉 2006: 230] ため、緩やかな定義をもってサラフィー主義を規定しようとする際に、ほとんどのムスリムがそれに該当することになってしまうという指摘がある[‘Imād 2013: 957; Wagemakers 2020: 22–23]。単にサラフと述べるだけでは特定の思想的内容は含意されず[小杉 2006: 640]、したがってこの緩やかな定義のみではサラフィー主義を他の思想潮流と分かち特徴が不明瞭なままであると言えよう。

## (2) ウィクトロウィッツの類型論

前述の緩やかな定義のみでは、思想や運動としての特徴が捉えられない。そのため、それを明らかにするためには、サラフィー主義と括られる潮流の内実に目を向ける必要がある。その際に用いられる分析概念として登場したものが、アメリカの政治学者であるウィクトロウィッツ(Wiktorowicz, Quintan)が「サラフィー主義運動の解剖学」と題した論文内で提示したサラフィー主義の類型論である。この類型論は現在においてもなお、最も影響力のある分析概念であるだけでなく、現代におけるサラフィー主義を語る際の枠組みとしても用いられるようになってきている。

ウィクトロウィッツは、現代においてサラフィー主義は多様化し、一見するとそれぞれ矛盾する傾向があり派閥が見られるものの、それらには共通する宗教的信条<sup>8)</sup>があり、それをいかにして現実の政治・社会的文脈のなかで実践するののかという方法論(Manhaj)によって、次の3つの潮流に分かれると説いた[Wiktorowicz 2006: 207–208, 216–228]。第1に、政治活動や暴力から距離をおき、説教や教宣活動を重視する純粋主義者(Purists)、第2に、サラフィー主義の信条を政治的領域にも適用することを積極的に唱え、時にはデモ活動に参加したり政党を組織したりし、政治的議論の場にも積極的に従事する政治的サラフィー主義者(Politicos)、第3に、より好戦的な立場をとり、現在の状況では暴力と革命の必要があるとし、時に政権を不信仰者とみなして打倒することも厭わないジハード主義者(Jihadis)の3つである。「9.11」以後の対テロ戦争の文脈のなかで、イスラームが安全保障化の対象とされ、サラフィー主義を安易に暴力と結びつけて脅威認識の主体として議論する論調が目立ったなかで、サラフィー主義が多様な側面を持つものとして理解するためにも有用な視座を提示したものであったと言えよう<sup>9)</sup>。

## (3) ウィクトロウィッツの類型論への経路依存とその問題

このウィクトロウィッツが提示した純粋主義的、政治的、ジハード主義的という複合語を用いた分析概念は、その後も各論者によって批判的に検討され精緻化されるなどして、現代に至るまで多くの研究者によって参照されるものとなっている<sup>10)</sup>。

ウィクトロウィッツ [2006] の分析概念を批判的に再検討している先行研究の中の代表的なも

8) [Wiktorowicz 2006] では、共通する宗教的信条として、3つの要素から構成されるタウヒード——主性の唯一性、美称と属性における唯一性、神性の唯一性(Tawhīd al-Rubūbiya, Tawhīd al-Asmā’ wa al-Sifāt, Tawhīd al-Ulūhiya [なお、政治的サラフィー主義者とジハード主義者はこれ以外にも統治権における唯一性 Tawhīd al-Hākimiya を共通する信条として持っていると言われるが、純粋/静寂主義者は、Hākimiya を「主権」と解釈することはクルアーンで用いられている意味合いよりも広い解釈であるとし、これを認めない])が挙げられ、それらを保持するためのビドア(逸脱)の忌避や啓典解釈における人間の理性・論理の忌避などについての言及がある[Wiktorowicz 2006: 208–214] が、ビドア論や人間の理性批判以外の特徴は一般的なスンナ派イスラームに共通する事項であるともいえよう。

9) 一方で、この「サラフィー主義の解剖学」が収録されているジャーナルは紛争・テロリズム研究分野のものであり、類型論の目的や意図には、米国の戦略的政策(過激化を防ぐためにどの潮流に対していかなる点に注力すべきか)のための視座を提供することがあるとも読み取れよう[Wiktorowicz 2006: 207–208]。

10) 例えば、[Bonney 2011; Gauvain 2013; Haykel 2009; Mandaville 2007; Pall 2013, 2018; Rabil 2014; Wagemakers 2009, 2012, 2016a, 2016b, 2016c] など。

のとしては、[Hegghammer 2009; Brachman 2009; Pall 2013; 2018; Wagemakers 2016a; 2016b; 2020]などが挙げられる。

ノルウェーのジハード主義研究者であるヘッグハンマー (Hegghammer, Thomas) は、ウィクトロウィッツが現実の政治・社会的文脈への対応の仕方でも分類を試みたのに対し、より政策に根ざしたアプローチから分類を試み、サラフィー主義をその暴力のタイプによってカテゴライズすることを試みた [Hegghammer 2009; Wagemakers 2020: 32]。

アメリカの研究者で対テロリズム研究が専門であるブラークマン (Brachman, Jarret) は、ウィクトロウィッツがサラフィー主義の潮流を大きく3つに分類していたのに対し、体制側につきサラフィー主義者とグローバルジハードを唱えるジハード主義者の間のカテゴリを詳細に分類<sup>11)</sup>することを試みた [Brachman 2009: 26]。しかし、ブラークマン自身がいかなる観点をもってこれらの間の区別を試みたのかということや、区別されたもの同士の境界が不明確であることなどから、現代においてウィクトロウィッツが提示した枠組みと比した際に広く用いられているとは言えない [Wagemakers 2020: 32–33]。

ハンガリー出身の研究者であるポール (Pall, Zoltan) は、統治者に対する政治的態度という観点から、まず従属的であるか積極的に政治参加を行おうとするかという2つのカテゴリに分け、その両者のなかでの政治的選好によって、さらに複合語を用いた下位分類を提示した [Pall 2013; Pall 2018: 15–22]。のちにポールは統治者に対する政治的態度で分類した2つの区分に、ジハード主義者という区分を加え、大きく分けて3つの区分で分類している [Pall 2018: 19–21; Wagemakers 2020: 33]。

オランダの研究者であるワーヘマーカース (Wagemakers, Joas) は、上記のウィクトロウィッツの分析概念を批判的に検討した先行研究を踏まえううえで、今一度それを積極的に評価しており<sup>12)</sup> [Wagemakers 2016a; 2020]、用語を一部変更したり細分化し項目を加えたりしつつも、ウィクトロウィッツが用いた3種類の枠組み内でこれらを再整理し統合することを試みている [Wagemakers 2020: 37]。そこでは、政治との関係性という軸上で、静寂主義(非-政治的; 政治的静寂主義)、政治的サラフィー主義(政治的)、ジハード主義(抗-政治的)という大きく3つに分類され、それぞれの間に段階的に下位分類が設定されている<sup>13)</sup>。

このウィクトロウィッツやそれを精緻化した分析概念への経路依存の結果、現代におけるサラフィー主義研究には次のような傾向が見られる。

まず、現代におけるサラフィー主義研究においては、運動主体の歷程や変容、イデオロギーや言説などを、フィールド調査によって各地域や国民国家別の文脈と照らして考察し、実証を試みる研

11) 具体的には、①「体制側につきサラフィー主義者 (Establishment Salafists)」、②「マドゥハリー／ジャーミー的サラフィー主義者 (Madkhali or Jami Salafists)」、③「アルバーニー的サラフィー主義者 (Albani Salafists)」、④「学問的サラフィー主義者 (Scientific Salafists)」、⑤「同胞団的サラフィー主義者 (Salafist Ikhwan / Muslim Brotherhood)」、⑥「スルールのサラフィー主義者 (Sururis)」、⑦「クトゥップのサラフィー主義者 (Qutbis)」、⑧「グローバル・ジハード主義者 (Global Jihadists)」の8つの類型に分類することを試みた [Brachman 2009: 26]。うち、思想家の名前を冠した②③⑥⑦については、それぞれ、②マドゥハリー (Rabī' ibn Hādī 'Amīr al-Madkhālī, b. 1931) やジャーミー (Muḥammad Amān ibn 'Alī al-Jāmī, 1931–96) の思想の支持者 [Brachman 2009: 29]、③アルバーニー (Muḥammad Nāṣir al-Dīn al-Albānī, 1914–99) の思想の支持者 [Brachman 2009: 31]、⑥スルール (Muḥammad Surūr ibn Nayīf Zayn al-'Ābidīn, 1938–2016) の思想や行動の支持者 [Brachman 2009: 36–37]、⑦サイド・クトゥップ (Sayyid Qutb, 1906–66) の思想やクトゥップ主義の支持者 [Brachman 2009: 38] を指すものとして、それぞれ定義されている。次頁の図表1も参照。

12) ワーヘマーカースは、サラフィー主義を政治との関係性に基づいて分類したウィクトロウィッツ [2006] を評価している [Wagemakers 2020: 33–34]。

13) 次頁の図表1も参照。

図表1 ワーヘマーカースによる、分類をめぐる議論の統合

ジハード主義者 <i>Jihadis</i>	政治的サラフィー主義者 <i>Politicos</i>	静寂主義者 (政治的静寂主義者) <i>Quietists</i>
政治との関係性によって分かれる		
anti-Political	Political	a-Political
静寂主義者 (政治的静寂主義者) <i>Quietists</i>	<p>* ウィクトロウィッツとポールらの分類では、「純粹主義者」(この両者は、静寂主義の特徴を持つ派閥のなかでの多様性にあまり着目していない)</p> <p>ワーヘマーカースはこの区分に3つの下位分類を設定</p> <p>①体制支持 (ブラクマンの「体制側につくサラフィー主義者」)</p> <p>②政治から距離を置く (ブラクマンの「アルバーニー的サラフィー主義者」)</p> <p>③宣伝主義 (ブラクマンの「マドゥハリーのサラフィー主義者」)</p>	
政治的サラフィー主義者 <i>Politicos</i>	<p>* ウィクトロウィッツの「政治的サラフィー主義者」やブラクマンの「同胞団的サラフィー」・「学問的サラフィー」・「スルールのサラフィー」・「クトゥブ的サラフィー」、ポールの「<i>Harakis</i> (活動家)」が該当</p> <p>政治家や、政治的理由から政治参加する主体、宗教的理由から政治参加する主体 (ポールの「純粹主義的・政治的志向」)、活動家などがこれに該当</p>	
ジハード主義者 <i>Jihadis</i>	<p>* ウィクトロウィッツの「ジハード主義者」、ポールの「ジハード主義者」</p> <p>ジハードの目的によって、3つのタイプがある</p> <p>①革命的ジハード主義者 (ヘッグハンマーの「社会革命的活動家」)</p> <p>②グローバル・ジハード主義者 (ブラクマンの「グローバル・ジハード主義者」、ヘッグハンマーの「グローバル・ジハード主義者」)</p> <p>③カリフ制を志向するジハード主義者</p>	

出典— [Wagemakers 2020] をもとに執筆者作成

究<sup>14)</sup> が主流となっているが、これらの研究で個別の対象を掘り下げる以前に、サラフィー主義とは何かという議論を行う際、多くがウィクトロウィッツやそれを精緻化した分析概念を参照するようになっている。そこでは、前節や本節の(1)で見たような緩やかな定義が据え置かれたまま、ウィクトロウィッツの類型を現代のサラフィー主義を説明する際の枠組みとして用いられるものが多く見られる<sup>15)</sup>。

次に、ウィクトロウィッツやワーヘマーカースの類型論における3つのカテゴリのうち、政治的サラフィー主義とジハード主義については、それぞれ、同胞団系のイスラーム主義組織を中心とした、イスラーム主義研究と、ジハード主義組織を対象としたジハード主義研究として、類型別で考察が深められている傾向が見られる<sup>16)</sup>。このように、国民国家内部でのサラフィー主義運動の研究や、イスラーム主義研究、ジハード主義研究というようなタイプ毎に研究が分化・深化しており、

14) 中東・北アフリカ地域における国民国家内でのサラフィー主義を扱った先行研究の代表的なものとして、サウジアラビア—[Lacroix 2011; Al-Rasheed 2007]、クウェート—[Pall 2016]、イエメン—[Boonefoy 2011]、エジプト—[Al-Anani 2016; Brown 2011; Gauvain 2013; Hoigilt and Nome 2014; Lacroix 2012, 2016; Ranko and Nedza 2016; Shalāta 2016; El-Sherif 2015]、ヨルダン—[Wagemakers 2009, 2012, 2016c]、レバノン—[Pall 2013, 2018; Rabil 2014]、チュニジア—[Cavatorta 2015; Merone 2015; Torelli, Merone and Cavatorta 2012]、マグリブ—[Wehrey and Boukhars 2019] などが挙げられる。

15) 現代のサラフィー主義を説明する際の枠組みとして用いられるウィクトロウィッツやワーヘマーカースの類型には、現代におけるサラフィー主義が幅広い種類の行動や信条のダイナミズムを有するものであることを示す効果がある一方で、イスラーム改革思想をイデオロギーとして選択した大衆運動として出現した同胞団系のイスラーム主義運動[末近 2018: 60-66]を、サラフィー主義という同じ1つのダイナミズムのなかに位置付けているという点は、第2節で確認したロジェールによる近年の指摘に反するものであると考えられる。

16) 脚注7も参照。

これを可能にする土台を提供しているという意味で、ウィクトロウィッツが提示した分析概念には意義があると考えられる。

#### 4. おわりに——現代のサラフィー主義研究における今後の課題と展望

本稿ではこれまで、現代におけるサラフィー主義研究のなかでも、とりわけ定義のされ方や分析概念に関する先行研究に焦点をあてて概観してきた。現代におけるサラフィー主義の実態は、過去の通説であったイスラーム改革思想の潮流に限定されないものとなっており、このような多様かつ複雑な側面を持つサラフィー主義を、宗教的信条を現実の政治・社会的文脈のなかで実践するための方法論の違いによって分類したウィクトロウィッツの類型論は、批判的に再検討されつつ現在に至るまで広く用いられるものとなっていることを確認した。ウィクトロウィッツの分析概念への経路依存によって各タイプや国民国家毎に研究が分化と深化を遂げており、分析概念は国民国家内の運動主体や思想家の行動のパリエーションを分析する際のツールとして効果的な側面がある一方で、次のような問題点もあると考えられる。

第1に、各タイプや国民国家別で研究が分化・深化することの副次的結果として、分化・深化した各タイプ間や国民国家間での研究同士の没交渉を招いてしまっており、現在のサラフィー主義研究には断片化傾向が見られる、という点である。第2に、ウィクトロウィッツやそれを批判的に再検討して精緻化した分析概念において用いられる複合語は、自称ではなく他称としての側面を強めている<sup>17)</sup>という点である。その結果として、運動主体や思想家を説明する際に分析概念を適用して考察することで個別の特徴が明らかになったとしても、ウィクトロウィッツの分析概念が現代におけるサラフィー主義を語る際の枠組みとして用いられるがゆえに、現代におけるサラフィー主義とは何か、そこには従来語られてきたサラフィーやサラフィー主義の思想といかなる連続性(continuity)や断続性(discontinuity)が見られるのかという根源的な部分が等閑視されたまま、分化・深化が生じており、結果としてより断片化を進めているのではないかと考えられる。

この経路依存性から脱却し、現代においてサラフィー主義と称される潮流の内在的論理や思想や運動の実態の理解を深めるためには、本稿における議論でも触れた、①ロジエールが批判の対象としており、イスラーム改革思想の潮流に位置付けられる思想家らが自らの運動を指す自称として用いていなかったのにもかかわらず、東洋学者による誤った解釈とその説明の受容と拡散によって一般化した、サラフィー主義＝イスラーム改革思想とする定義(第2節)、②多様化するサラフィー主義の実態を一般化する過程で、スンナ派イスラーム一般の特徴ともいえる「篤信の初期世代を見倣い、また彼らを現在の生活のモデルや見本として模倣することを訴える潮流」をサラフィー主義として定義している緩やかな定義(第2,3節)、③権力主体による安全保障化の対象として語られる「過激な」サラフィー主義、などの定義のされ方や一般化、さらには分化・進化した研究同士の没交渉によって痩せ細ってしまっているサラフィー主義理解を乗り越える必要がある。具体的には現代における運動主体や組織実態の言説や行動を、それが置かれている現実の政治・社会的文脈と

17) サラフィー主義者は、自分自身を形容する際にサラフィー主義者(Salafi)やサラフィー主義(al-Salafiya)という用語を使用しない、という指摘もある[Wagemakers 2016b; Wehrey & Boukhars 2019]。また、複合語を用いた分析概念は、結果として生じた新たな事象に対応するために新たに形容詞を付けて創作され、説明したい現象や主体にあわせてそれを適用しているとも考えられる。多様化する複合語を用いた分析概念は、ワーヘマーカースが示したように、政治との関係性という軸に沿って段階的に整理できる[Wagemakers 2020]としても、他称性を高めていることは確かである。さらに、複合語を用いた分析概念によって運動主体や思想家を分類する際に、信条やイデオロギーに見られる特徴/信条を実践する方法論や手段/目的など、同じ複合語を用いて説明していたとしても研究者によって分類の基準に差異が見られるなど(例えば、[Wagemakers 2016a: 13]における[Pall 2013]がおこなった分類に対する批判を参照)、表現上・区分上の矛盾を内包してしまっていると考えられる。



照らして帰納的にサラフィー主義と称される潮流の特徴を浮き彫りにすること、その潮流が有する思想的ネットワークを探ることによる、従来語られてきたサラフィーやサラフィー主義の思想との連続性や断続性を解明すること、ウィクトロウィッツやワーヘマーカーが示した3つの類型の特徴を有する運動体や組織が、同時代／同じ政治・社会的文脈において存在している地域に着眼し、それらの実態の比較考察を行うことなどが今後の課題となろう<sup>18)</sup>。

## 引用文献および先行研究リスト

<日本語文献>

- アトワーン, アブドルバーリ 2015『イスラーム国』(春日雄宇訳・中田考監訳) 集英社インターナショナル.
- ウォリック, ジョビー 2017『ブラック・フラッグス——「イスラーム国」台頭の軌跡(上・下)』(伊藤真訳) 白水社.
- ケペル, ジル, アントワヌ・ジャルダン 2017『グローバル・ジハードのパラダイム——パリを襲ったテロの起源』(義江真木子訳) 新評論.
- 小杉泰 1994『現代中東とイスラーム政治』昭和堂.
- 2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会.
- 鈴木恵美 2012「体制移行期における宗教政党の躍進——2012年人民議会選挙の考察」伊能武次・土屋一樹(編)『エジプト動乱——1.25革命の背景』<アジ研選書32>日本貿易振興機構アジア経済研究所, pp. 87–110.
- 2013『エジプト革命——軍とムスリム同胞団、そして若者たち』<中公新書2236>中央公論新社.
- 福田安志 2012「政策提言研究 サラフィー主義の発展とその性質・政策——サウジアラビアにおけるワッハーブ派との関係を中心に」日本貿易振興機構アジア経済研究所 <[https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Seisaku/1207\\_fukuda.html](https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Seisaku/1207_fukuda.html)> (2020年7月3日閲覧).
- 保坂修司 2017『ジハード主義——アルカイダからイスラーム国へ』<岩波現代全書106>岩波書店.
- 末近浩太 2002「サラフィー主義」大塚和夫・小杉泰・小松久夫・東長靖・羽田正・山内昌之(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p.418.
- 2018『イスラーム主義——もう一つの近代を構想する』<岩波新書1698>岩波書店.
- 中田考 2002「サラフ」大塚和夫・小杉泰・小松久夫・東長靖・羽田正・山内昌之(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p.418.
- ムバイヤド, サーミー 2016『イスラーム国の黒旗のもとに——新たなジハード主義の展開と深層』(高尾賢一郎・福永浩一訳) 青土社.
- 森山央朗 2016「スンナ派の宗派形成とイスラーム主義の系譜」平成27年度外務省外交・安全保障調査研究事業『安全保障政策のリアリティ・チェック——新安保法制・ガイドラインと朝鮮半島・中東情勢：中東情勢・新地域秩序』日本国際問題研究所, pp. 23–39.
- リダー, ムハンマド・ラシード 1987『現代イスラーム国家論——「アル＝マナール」派思想における政府と立法』(小杉泰編訳・解説) 国際大学国際関係学研究所.

18) なお、本稿において取り上げた先行研究は欧米言語のものが中心であったため、アラビア語文献における研究動向については、次回以降の課題である。

ロウ, オリヴィエ 2019 『ジハードと死』(辻由美訳) 新評論.

ワイス, マイケル, ハサン・ハサン 2018 『イスラム国——グローバル・ジハード「国家」の進化と拡大』(山形浩生訳) 亜紀書房.

<外国語文献>

- Al-Anani, Khalil. 2016. “Unpacking the Sacred Canopy: Egypt’s Salafis between Religion and Politics,” in Francesco Cavatorta and Fabio Merone (eds.), *Salafism after the Arab Awakening: Contending with People’s Power*, London: Hurst & Company, pp.25–42.
- Atwan, Abdel Bari. 2015. *Islamic State: The Digital Caliphate*. London: SAQI.
- Bonnefoy, Laurent. 2011. *Salafism in Yemen: Transnationalism and Religious Identity*. London: Hurst & Company.
- Brachman, Jarret M. 2009. *Global Jihadism: Theory and Practice*. London: Routledge.
- Brown, Jonathan. 2011. *Salafis and Sufis in Egypt* (The Carnegie Papers). Washington, DC: Carnegie Endowment for International Peace.
- Cavatorta, Francesco. 2015. “Salafism, liberalism, and democratic learning in Tunisia,” *The Journal of North African Studies* 20(5), pp.770–783. <doi: 10.1080/13629387.2015.1081464>.
- Cavatorta, Francesco, Fabio Merone (eds.). 2017. *Salafism after the Arab Awakening: Contending with People’s Power*. London: Hurst & Company.
- Enayat, Hamid. 2005. *Modern Islamic Political Thought*. New York: I.B.Tauris (Orig. pub. 1982).
- Gauvain, Richard. 2013. *Salafi Ritual Purity: In the Presence of God*. London: Routledge.
- Gerges, Fawaz A. 2017. *ISIS: A History*. Princeton: Princeton University Press.
- Haykel, Bernard. 2009. “On the Nature of Salafi Thought and Action,” in Roel Meijer (ed.), *Global Salafism: Islam’s New Religious Movement*, London: Hurst & Company, pp.33–57.
- Hegghammer, Thomas. 2009. “Jihadi-Salafis or Revolutionaries? On Religion and Politics in the Study of Militant Islamism,” in Roel Meijer (ed.), *Global Salafism: Islam’s New Religious Movement*, London: Hurst & Company, pp.244–266.
- Høigilt, Jacob, Frida Nome. 2014. “Egyptian Salafism in Revolution,” *Journal of Islamic Studies* 25(1), pp.33–54. <doi: 10.1093/jis/ett056>.
- Hourani, Albert. 1983. *Arabic Thought in the Liberal Age 1798–1939*. Cambridge: Cambridge University Press (Orig. pub. 1962).
- ‘Imād, ‘Abd al-Ghanī. 2013. “al-Ḥarakāt al-Salafīya: al-Tayyārāt, al-Khiṭāb, al-Masārāt,” in ‘Abd al-Ghanī ‘Imād (ed.), *al-Ḥarakāt al-Islāmīya fī al-Waṭan al-‘Arabī*, Bayrūt: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya, pp.957–1002.
- Lacroix, Stéphane. 2011. *Awakening Islam: The Politics of Religious Dissent in Contemporary Saudi Arabia*. Cambridge: Harvard University Press.
- . 2012. *Sheikhs and Politicians: Inside the New Egyptian Salafism* (Policy Briefing). Doha: Brookings Doha Center.
- . 2016. *Egypt’s Pragmatic Salafis: The Politics of Hizb al-Nour*. Washington, DC: Carnegie Endowment for International Peace.
- Lauzière, Henri. 2010. “The Construction of *Salafīyya*: Reconsidering Salafism from the Perspective

- of Conceptual History,” *International Journal of Middle East Studies* 42(3), pp. 369–389. <doi: 10.1017/S0020743810000401>.
- . 2016. *The Making of Salafism: Islamic Reform in the Twentieth Century*. New York: Columbia University Press.
- Maher, Shiraz. 2017. *Salafi-Jihadism: The History of an Idea*. London: Penguin Books.
- Mandaville, Peter. 2007. *Global Political Islam*. London: Routledge.
- Meijer, Roel, ed. 2009. *Global Salafism: Islam’s New Religious Movement*. London: Hurst & Company.
- . 2009. “Introduction,” in Roel Meijer (ed.), *Global Salafism: Islam’s New Religious Movement*, London: Hurst & Company, pp. 1–32.
- . 2016. “Conclusion: Salafis and the Acceptance of the Political,” in Francesco Cavatorta and Fabio Merone (eds.), *Salafism after the Arab Awakening: Contending with People’s Power*, London: Hurst & Company, pp. 219–239.
- Merone, Fabio. 2015. “Enduring Class Struggle in Tunisia: The Fight for Identity beyond Political Islam,” *British Journal of Middle Eastern Studies* 42(1), pp. 74–87, <doi: 10.1080/13530194.2015.973188>.
- Moubayed, Sami. 2015. *Under the Black Flag: An Exclusive Insight into the Inner Workings of ISIS*. New York: I.B.Tauris.
- Oildort, Jacob. 2015. *The Politics of “Quietist” Salafism*. Washington, DC: The Brookings Institution.
- Pall, Zoltan. 2013. *Lebanese Salafis between the Gulf and Europe: Development, Fractionalization and Transnational Networks of Salafism in Lebanon*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- . 2016. “Salafi Dynamics in Kuwait: Politics Fragmentation and Change,” in Francesco Cavatorta and Fabio Merone (eds.), *Salafism after the Arab Awakening: Contending with People’s Power*, London: Hurst & Company, pp. 169–186.
- . 2018. *Salafism in Lebanon: Local and Transnational Movements*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rabil, Robert G. 2014. *Salafism in Lebanon: From Apoliticism to Transnational Jihadism*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Ranko, Annette, Justyna Nedza. 2016. “Crossing the Ideological Divide? Egypt’s Salafists and the Muslim Brotherhood after the Arab Spring,” *Studies in Conflict & Terrorism* 39(6), pp. 519–541, <doi: 10.1080/1057610X.2015.1116274>.
- Al-Rasheed, Madawi. 2007. *Contesting the Saudi State: Islamic Voices from a New Generation* (Cambridge Middle East Studies). Cambridge: Cambridge University Press.
- Saeed, Abdullah. 2013. “Salafiya, Modernism and Revival,” in John L. Esposito and Emad El-Din Shahin (eds.), *The Oxford Handbook of Islam and Politics*, New York: Oxford University Press, pp. 27–41.
- Shalāṭa, Aḥmad Zaghlūl. 2016. *al-Da‘wa al-Salafiya al-Iskandariya: Masārāt al-Tanzīm wa Mālāt al-Siyāsa*. Bayrūt: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-‘Arabīya.
- El-Sherif, Ashraf. 2015. *Egypt’s Salafist at a Crossroads: Part 3 of a Series on Political Islam in Egypt*. Washington, DC: Carnegie Endowment for International Peace.

- Shinar, P., W. Ende. 2002. "Salafiyya," in P. Bearman, Th. Bianquis, C.E. Bosworth, E. van Donzel, W.P. Heinrichs (eds.), *Encyclopaedia of Islam, 2nd Edition*, Consulted online on 20 May 2020, Brill, <[http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912\\_islam\\_COM\\_0982](http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0982)> First published online: 2012.
- Torelli, Stefano M., Fabio Merone, Francesco Cavatorta. 2012. "Salafism in Tunisia: Challenges and Opportunities for Democratization," *Middle East Policy* 19(4), pp. 140–154. <doi: 10.1111/j.1475-4967.2012.00566.x>.
- Wagemakers, Joas. 2009. "A Purist Jihadi-Salafi: The Ideology of Abu Muhammad al-Maqdisi," *British Journal of the Middle Eastern Studies* 36(2), pp.281–297.
- . 2012. *A Quietist Jihadi: The Ideology and Influence of Abu Muhammad al-Maqdisi*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2016a. "Revisiting Wiktorowicz: Categorising and Defining the Branches of Salafism," in Francesco Cavatorta and Fabio Merone (eds.), *Salafism After the Arab Awakening: Contending with People's Power*, London: Hurst & Company, pp. 7–24.
- . 2016b. "Salafism," *Oxford Research Encyclopedia of Religion*. (Accessed 20 Jul. 2020) <<https://oxfordre.com/religion/view/10.1093/acrefore/9780199340378.001.0001/acrefore-9780199340378-e-255>>.
- . 2016c. *Salafism in Jordan: Political Islam in a Quietist Community*. New York: Cambridge University Press.
- . 2020. "Salafism: Generalisation, Conceptualisation and Categorisation," in Magnus Ranstorp (ed.), *Contextualising Salafism and Salafi Jihadism*, Copenhagen: Nationalt Center for Forebyggelse af Ekstremisme, pp.22–37.
- Warrick, Joby. 2015. *Black Flags: The Rise, Fall and Rebirth of the Islamic State*. New York: Random House.
- Wehrey, Frederic, Anouar Boukhars. 2019. *Salafism in the Maghreb: Politics, Piety, and Militancy*. New York: Oxford University Press.
- Weiss, Michael, Hassan Hassan. 2016. *Isis: Inside the Army of Terror*. New York: Regan Arts.
- Wiktorowicz, Quintan. 2006. "Anatomy of the Salafi Movement," *Studies in Conflict & Terrorism* 29(3), pp. 207–239. <doi: 10.1080/10576100500497004>.